

## 羽化

さて、場面を、大斎原から真砂の地に移そう……。

真砂の地では、安珍が去った後、しばらく、表面上……いつもと変わらない平穏な日々が続いていた。

清姫は、毎日、川を泳いだり、樹に上ったり……郷の子ども達と、泥だらけになって遊んでいる……。

清姫は、安珍との……あの夜の事を誰にも、話す事はなかった……。

清姫は、あの時、安珍が自分を抱きしめた意味を……そして安珍が自分に何をしようとしたのか……全く理解していなかったが……それが、安珍と自分との間の二人だけの……とても、大切な秘密なんだと感じている。

異変は……安珍が、真砂の地を立つてから、数日後に起きた……。

清姫は、神子の衣装を纏って、ハツと、いつものように、滝尻王子の掃除をしていた。

ハツが清姫に声をかけた……。

「もう、ここはよいですから、神殿に御水を上げて来て下さい。」

珍しく姫がぐずった……。

「ハツ……ハツに上げてきてもらったら、ダメか？」

「姫……」

ハツは、なぜ、姫がそんな事を言うのだろうか……少し、とまどいながらも、微笑みながら説明する……。

「神殿に上がる事が出来るのは……姫様のような穢れを知らない乙女だけなのです……このハツのような大人の女が上があれば……罰があたりますわ……。」

清姫は、それ以上は、何も言わず……白磁の器に水を入れ、神殿に上がった……。

一歩、足を踏み入れたとたん、足が、ジーンとしびれる気がした。

こんな感覚は今まで覚えた事はない……。

ざわざわと風に揺れる樹木の音が、堂全体を揺らして……まるで、恐ろしいうなり声をあげているようだ……。

わたしは、神殿にあがってはいけないのだ……。

わたしは……それを隠して……いけない事をしている……。

わたしは……きつと、罰があたるだろう。

ぐるぐると、清姫のまわりの景色が、うずを巻いた……。